

支援センターの運営を支えてくださる皆様

～こころより感謝申し上げます～

令和元年7月1日～令和2年2月29日

アイウエオ順(敬称は略させていただきます。)

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	堀野 江利子	旭化成(株)富士支社	熱川温泉観光協会
天野 一	家本 誠	井口 登	(株)石井組
石原 えつこ	石割 誠	(一財)市川交通安全財団	伊藤園産業(株)
(株)伊藤園	伊東聖友会	猪之原 勝美	岩崎 明司
磐田警察署	磐田地区安全運転管理協会	内山 隆司	(株)エスバルストリームフェリー
大和多 清美	大庭 茂利	大場 由太郎	大仁警察署
小笠運送(株)	岡野 廣治	小国神社玉衣会	長田建設工業(株)
大村 裕二	表富士工業団地協同組合	掛川警察署	掛川商工会議所
上 陽子	河合 竜司	川崎 晃	汗管興業(株)
菅野 雄児	菊池 英明	木宮 明恵	コーニングジャパン(株)
湖西警察署	湖西警察署親睦会	興水誠司	御殿場警察署
後藤 榮	後藤 千代子	込山 正秀	静岡県警察交通OB会
JA静岡市あさはたまん市	静岡ガス(株)	静岡県警察本部刑事部	静岡県警察カレンダー制作委員会
静岡県警察官友の会湖西支部	静岡県警察官友の会島田支部	静岡県警察官友の会裾野支部	静岡県警察官友の会浜松西支部
静岡県警察官友の会藤枝支部	静岡県警察官友の会松崎支部	(一財)静岡県警察職員互助会	静岡県警察本部会計課施設課
静岡県警察本部機動捜査隊東部支隊	静岡県警察本部警察相談課	静岡県警察本部公安課	静岡県警察本部自動車警ら隊東部支隊
静岡県警察本部少年課	静岡県警察本部捜査第二課	静岡県警察本部総務部	静岡県警察元警務課送別会
静岡県公営競技連絡協議会	静岡県高速度道路交通安全協議会	静岡県交通安全協会森地区支部	静岡県交通安全協会沼津地区支部
静岡県交通安全協会浜北地区支部	(社)静岡歯科医師会	静岡県農協暴力防犯対策協議会	静岡市自治会連合会
静岡中央警友会	静岡鉄道(株)	静岡トヨペット(株)	静岡南警友会
静岡リビング新聞社	島田警察署	島田商工会議所	清水警察署
下田有線テレビ放送(株)	初任科短期過程第55期生一同	末木 宏典	鈴木 寛一郎
鈴木 敏弘	鈴木 智善	鈴木 通代	鈴与(株)
裾野警察署	裾野ライオンズクラブ	セキスイハイム東海(株)	滝澤 聡康
武田 章	田代 稔	田中 広子	玉川 隆全
田村太郎様を送る会	中部電力(株)	(株)土井酒造場	内藤 光雄
沼津警察署	沼津駿東遊技場組合	沼津正光会	橋本昌昭
浜北警察署管内職域防犯協会	浜松中央警察署	浜松西警察署	浜松東地区国際交流企業連絡協議会
原木 英三	伴 信彦	POB反社対策連絡協議会	平塚 哲也
袋井警察署管内職域防犯管理協会	藤枝警察署	藤枝遊技業組合	富士岳南ライオンズクラブ
富士警友会	藤田 利彦	富士宮中央ライオンズクラブ	富士宮ライオンズクラブ
弁護士法人こだま法律事務所	堀水 利恵	松澤 絳一郎	松本喜代子
松谷 清	(株)丸川	(株)MARUGOH	丸明建設(株)
丸山 博之	三島警察署	(株)水野組	水野 雅元
溝口 敦	峰田 武	望月 威男	森 則夫
(有)焼津自動車学校	焼津市遊技業組合	安本 晋	ヤマハ発動機(株)
山本 正子	幸谷 和征	吉田 倫子	吉田 千登世
良知 淳行	鷺巣 洋子	渡辺 隆之	割菊 健太郎
「犯罪被害者週間」inエスバルストリームプラザ募金	犯罪被害者等支援講演会募金	支援センター内募金箱	匿名18件

《賛助会員・寄付のお願い》

静岡犯罪被害者支援センターの活動は、皆様の寄付金等で支えられています。当支援センターの主な活動として、電話相談、直接的支援、支援員の養成・研修、広報啓発活動等を行っています。被害者支援活動の趣旨にご賛同いただき、ご支援ご協力をお願いいたします。

賛助
会費

法人・団体
個人

10
10

10,000円以上
2,000円以上

賛助会員の方々には、広報誌「支援センターだより」などをお送りしています。また、被害者支援講演会等のイベントを開催する際には事前にお知らせいたします。

【振込口座】 郵便振替:口座番号 00870-7-50944
【加入者名】 NPO法人静岡犯罪被害者支援センター

ホームページアドレス

<http://www.shizuoka-hhsc.jp>

後援

静岡県警察本部
静岡県犯罪被害者支援連絡協議会



発行 認定NPO法人
静岡犯罪被害者支援センター
〒420-0032
静岡市葵区両替町1-4-15 芙蓉ビル4階
発行月 令和2年 3月

～被害者と共に考え、共に歩む～

vol.48

支援センターだより



令和元年11月29日(土)、静岡市葵区の札の辻クロスホールにおきまして、「犯罪被害者等支援講演会inしずおか2019」を開催いたしました。毎年、「犯罪被害者週間」の一環として開催しております講演会も15回目となり、令和最初の講演は、娘さんを犯罪被害により亡くされた加藤裕司様を講師にお招きし、「あすを生きる!」と題してご講演をいただきました。

娘さんを助けてあげられなかったという自責の念や、裁判において加害者と対面し戦い続けてこられたこと等、時折声を詰まらせながらも話していただきました。聴講された方々は、親や子、そして大切な仲間を思い浮かべながら、その苦しみに胸が締め付けられるような思いだったと思います。

また、加藤様はご自身の経験から、犯罪被害者やその家族が少しでも必要な支援を受けられるようにと活動を続けておられるとのことでした。静岡県におきましても、どの居住地においても同じ支援、援助が早い段階から受けられ、再び安心して暮らしていけるように、全市町に「犯罪被害者支援条例」の早期制定を目指し、サポート体制を充実させる必要があると感じました。

2頁以降に加藤様の講演内容の全文を掲載しております。実際に経験されてこられたご遺族の生の声です、感じ方は様々あるかと思いますが、一人一人ができる支援の形を考える機会となることを願っております。

～目次～

- 「犯罪被害者等支援講演会inしずおか2019」
【講演】あすを生きる!(加藤 裕司 様)
- 「犯罪被害者週間」キャンペーン活動
- 感謝状贈呈:『栄誉章』受賞・犯罪被害者支援功労者表彰
- 2019年度日本財団預保納付金支援事業
- ホンデリング、寄付型自動販売機・募金箱設置について
- 会費納入者・寄付者ご紹介、寄付のお願い

静岡県公安委員会指定 犯罪被害者等早期援助団体
認定NPO法人(特定非営利活動法人)

静岡犯罪被害者支援センター



電話相談

054-651-1011

受付時間:10時00分～16時00分
(土・日・祝日・年末年始を除く)

「あすに生きる！」

講師 加藤 裕司 様



はじめに

ただいまご紹介をいただきました加藤でございます。静岡犯罪被害者支援センター様のお招きにより、岡山市岡山市からやってまいりました。先にお詫びをしておかなければならないのですが、このような高い位置から、皆様方の前でお話をさせていただくという失礼をご容赦いただければと思っております。

大まかに今日のお話は、前半を時系列に、事件をつぶさに追いながら、この事件の悲惨さ等をご紹介し、いろんなシーン、いろんな場面での我々家族の感情の揺れであるとか、行動の変化あたりを前半でご紹介をさせていただき、後半では、事件を通して感じた問題点であるとか、或いは今後私がどのような活動を続けていこうとしているのか、決意等をお聞きいただけたらと思います。



では、最初に、私の娘をご紹介させていただきます。前列向かって右端が私の娘「加藤みさ」と申します。「みさ」は平仮名で「みさ」と書きます。この写真

は、娘が亡くなるちょうど2時間ぐらい前の、最後の写真というわけですが、前列真ん中に座っていらっしゃる方の送別会を仕事が終わった後、ささやかに行った後の一コマだそうです。生きていた最後の鮮明な写真ということが言えるかなと思います。

私たちの家族が、被害に遭う前にどういった生活をしてきたかということですが、事件が起きたのは2011年（平成23年）9月30日の金曜日のことでした。その日までは私たち家族は4人全員が仕事をしていました。私は中小企業さんのコンサルタントをしながら、妻は個人で損害保険の代理店を、長男は半導体の関係の仕事、そして娘はIT会社の総務に勤めている生活を送っていました。

今回の事件は、恐らく誰にでも起こりうる可能性がある事件なのかなと思います。私たち家族は、娘の「死」というものを迎える覚悟というものが全くできておりませんでした。交通事故でお子様等を亡くされた家族の方も一緒だと思いますけれども、予測もできず、ある日突然という出来事で、非常に苦しい思いをした事件であります。

今回のお話は、私、父親としての立場ということでお話をさせていただきたいと思っております。母親は実際にお腹を痛めて産んだ実の親でありますから、私、父親とはちょっと違う感情を持っていると思います。あくまでも父親の意見だ

と思ってお聞きください。

この会場の中にもいらっしゃる男性諸君も、恐らく娘さんをお持ちでしたら同じ思いではないのかと思うわけですけれども、娘というのはいつも気になる存在でありました。いつも妻の傍にべったりと寄り添っている。妻と娘は身長が160cm、体重が50kg弱ということではほぼ同じ体型。年齢は当然違いますけれども、自分たちが買ってきた洋服を取っ換えっかしながら着ている。キャッキャしながら話している。キャッキャ言いながらいる関係ですね。そこにオヤジである私が入ろうとしてもなかなかカバリアがあって入れないんですね。気を引こうと思って、一生懸命オヤジギャグを飛ばすんですけども完全に無視されて辛い日々を送っている。まあ世の中の父親はそうなのかなと思います。

私が妻と結婚したのは、妻が23歳の時でした。娘は当時27歳でしたから、いつ嫁に行ってもおかしくない年齢になっていました。小さいころずっと見続けてきて、歳が大きくなるにつれてだんだん近づきにくく、なんか眩しくて、触れていいのか触れてはいけないのか戸惑いながら、子の成長を見守っているという状況でありました。

娘はどちらかというと控えめな性格なものですから、なかなか彼氏ができないのではないかなと思っていました。後から聞いた話にはなりますけれども、娘は亡くなる一月前の8月に、彼から17回目のプロポーズを受け、16回拒否をしたそうですけれども、17回目にやっとプロポーズを受けてくれたということを後で聞かされました。ですから、彼氏のショックというのは私たち家族以上に大きなものだったのではないかと想像しております。

私個人としては、娘といつか一緒に映画を見に行きたい。或いはショッピングに行きたい。食事に行きたい。できれば腕を組んで、皆さんに見せびらかしながら歩いてみたい。そんな希望を持っておりました。娘に散々「映画に行こうよ。」と誘うんですけども、「いや。」って言われます。「友達と行った方がよっぽど良い。」と。「友達の分も出すから一緒に行こう。」と。「いやだ。」って言われます。「分かった。食事も全部出す。丸抱えで行こう。」それでも「いやだ。」と言われます。で、どうするかと言いますと、最終的にDVDになるのを待って、レンタルで一人寂しく観ているという姿ですね。最後は、結婚式にバージンロードを一緒に歩くんだという願いを持っておりましてけれども、一度も叶うことはありませんでした。



事件発生からの日々

最初に戻りますが、9月30日金曜日は、娘は当時ヨガ教室にも通っておりましたので、妻から帰るのが10時頃になると聞かされておりました。ちょっと残念だなと思いながら待っておりましたけれども、12時になっても連絡はありませんでした。恐らく彼氏と一緒にのかなと想像していて、それだったら遅くなるのもしょうがないかなと思っていて、まあ明日の朝には帰ってくるだろうと思いながら朝になったのですけれども、結局姿は見えませんでした。心配なので妻が電話をすると、その電話はすぐに留守電に切り替わっていました。そしてメールも出したんですけども、このメールも返信が全くありませんでした。今まで一度も電話をかけてこなかったとか、或いはメールに対して返信がないということは、ただ一度もありませんでした。どんなに個人的に都合が悪くても、必ず連絡は取ってくる子でしたから、「なんで連絡がないんだろうな。」という不思議さは感じていました。ただ、朝、予定通りというか、私は土曜日、いつものように仕事に出掛けました。そして、いつも通り7時30分ぐらいでしょうか、8時ぐらいでしょうか、家に帰ってきますと、もう妻が真っ青な顔と言いましょか、真っ白な顔をしてました。「みさが、帰ってこない。いくら連絡をしても連絡が取れない。」と言ったので、それを聞いた時点で私は、娘は交通事故に巻き込まれたんじゃないかなと思いました。娘は交通事故に遭って、連絡を取るのも病院に運ばれて、どういう状況か分かりませんが、取れない状況にあると。だったらこれは警察にお伺いして調べてもらうしかないなと思っていて、近くに赤警警察署、歩いて10分ぐらいのところにあるんですけども、そこに行つて一通りの説明をいたしました。そして娘の車のナンバーもお伝えしました。そのとき、ここに警察関係の方がいらっしゃったら失礼な話になりますけれども、私は警察の方はそんなに信用しておりませんでした。というのは、平素、警察の方と縁がない生活でしたから、縁があるといえば交通違反、スピード違反、駐車違反、進入禁止、罰金のみ。点数も引かれますけれども、そういうことしかなかったということに加えて、当時マスコミを騒がせていたのが、スカー事件でした。警察の方に何回も相談に行つたけれども取り合ってくれない、いざ実際に事件が起きてからようやく動くということが報道されておりました。従って、たった一日姿が見えなかつただけで警察の方が動いてくれるとか、まだ事件か何かかわからないうちに動くことはないだろうなというように思っていました。

ところが、びっくりしました。朝の8時ごろだったと思いますが、岡山西警察署から電話がありました。この西警察署というのは、娘が働いている会社の管轄の警察署ということです。「お嬢さんの車が見つかりました。お父さんすぐ来てください。」という電話でした。非常にびっくりしました。「え、娘の車を探してくれたのか。」という印象でした。急いで駐車場まで行きました。すると、もうすでに10人ぐらいの警察の方がいらっしゃって、素人の私の目から見ても、明らかに半分ぐらいの方が鑑識の方のように見えました。色々調べていただいたんですけども。「お父さん

予備キー持っていますか。」と言われたんですけども、当然持っていません。妻に電話しました。妻は「分からない。」と言いました。「そんなことはない。お前が決めた場所にちゃんとあるだろう。」と言ったんですけども。押し入れの扉を開けたところに家族4人分の車のキーは置いてあるんですね。それも妻本人が決めたことです。言った本人が全く分からないというので、このままでは埒が明かないなと思って、専門のカギの業者さんをお呼びいただいてカギを開けていただきました。

そして、いろいろ指紋どとか調べていただいた結果として、捜査員の方の話によると、「お嬢さんは9月30日の金曜日の晩に退出した後、この駐車場には来ていませんね。」ということでした。ということは、会社を出た後、一人でどこか行ったか、だれかと一緒に歩いて行ったか、車で行ったか分かりませんが、駐車場には来ていないようですよと言われました。なるほどと、私も色々見ただんですけども、車の後部座席にはヨガ教室で使うマットですとか、トレーニングウェアであるとか、きちんと畳んでおりましたので、全く触っていないという印象でした。警察の方から「詳しい事情を聞きたいので、西署まで奥さんと一緒に来てください。」と言われまして、妻を呼び、一緒に西署に出掛けました。

車の発見のことですけれども、実はその土曜日の晩、赤警警察署に行つて帰って来てからも私は何もすることがありません。何もできません。「どうしたものかな。どうしたら発見できるのかな。」と思いつつ、娘が車で通ったであろう道を辿って会社の駐車場まで行けば何かわかるかもしれない。そう思って土曜日の晩、9時か10時ぐらいに、車を走らせて会社の駐車場まで行きました。途中コンビニが数件あるんですけども、まさかこんなところにいるとは思われないんですけども、ひょっとすればと思つて、一軒一軒立ち寄つて、車がないかどうか、本人がいるかどうか確認しながら駐車場まで行きました。駐車場は非常にだだっ広い敷地の中で真っ暗ですね。何も分かりませんでした。車をずっと走らせたんですけども。そのときに娘が言っていたことを思い出しました。あまりに従業員の車の数が多くて駐車場に収容しきれないと、近所の方の空いたスペースだとか、駐車場をお借りして停めているということを知っていたので、その周辺の民家も探ってみました。ところが、夜に車のライトを家に正面から当てるわけにもいきませんから、道路を照らしたこぼれた光で探すというぐらいでしたから、ほとんど分かりませんでした。そして、諦めて帰ってきたわけですけれども、実は岡山西署の方が、全く反対の方向から、同じ時間か、たぶん少し時差があると思うんですけども、反対方向から探してくれていたようでした。ところが、やはり夜ということで見つからず、翌朝、日曜日の朝、再度捜索したら車が見つかったということでご連絡をいただいたということです。本当にびっくりしました。

警察にお話をするとき、私たち夫婦の感情というのは、そんなに大げさに思っておりませんでした。「なんで連絡しないんだろうな。困った子だな。こんなこと一度もなかった

のに。」というぐらいのレベルでした。ですから、警察に行っても、淡々と話をしていたんですけども、その時に警察の方から一枚の画像を見せられました。【写真の説明】これが、向かって左の下ですね。ちょっとぼやけておりますけれども、男女が一緒に歩いています。「この女性がお嬢さんですか。」と言われたのですが、「姿、形、着ているもの、持ち物から見ても娘で間違いありません。」と申し上げました。「それでは、隣に歩いている男性は彼氏ですか。」って言われたんですが、彼はもう少し背が高く、ラフな格好をしていて、あまりビジネスマンの格好をしていませんので、「たぶん違うと思います。」「じゃあ、誰ですか。」と言われたのですが、「分かりません。」とお答えしました。我々夫婦が見せられた画像というのは、この画像ただの一枚のみです。今お見せしているこのような画像というのは、事件が終わってから、会社からご提供いただいたものになります。この他の画像というのは、こんなに暗いんですけども、実は中はこんなに鮮明に映ります。ちょうど、2011年9月30日、18時10分にタイムカードを打って、退出しようとしている娘の姿です。

警察から帰ってですね、我々夫婦が考えたことというのが、「いったいあの男は誰なんだろう。」娘は芯の強い子で、しかも軽くないと言いますか、知らない人に誘われてのこのこ付いていくような子ではありません。一緒に歩いているということは知り合いなんだろうなということで、恐らく会社の同僚か、もしくは中学校とか高校の同級生に偶然声を掛けられて歩いているのかなと想像いたしました。情報としてはそれぐらいしかなかったの、本当に悶々とする思いがありました。当時、私は四国の高松に週3日程、コンサルタントの仕事で行っておりました。『マリナー』という瀬戸大橋を渡る列車があるんですけども、一時間ぐらいかかります。その中で常に考えているのが、娘のことだけなんです。それで、不思議と涙が出てきます。「娘はいったいどこにいるんだろう。ちゃんとご飯を食べているんだろうか。寝ているんだろうか。無事なんだろうか。」と思いながら、それを確かめることもできず、何もできない自分が、非常に情けなくなって、涙が止まらない日々を過ごしました。仕事先に行って仕事をしようとするんですけども手に付きません。仕事をしている場合なんだろうかと、自分の声がするんですね。先方にちょっと事情を説明して、「今日はちょっと帰らせてください。」と言って、行っっては帰り、行っっては帰りを繰り返していました。家にも、ご飯を食べようとする、「ご飯を食べさせてもらっていないかもしれない。」、そんな風に考えると喉につかえてご飯が食べられなくなるんですね。寝ようとする「寝てないかもしれない。」と、自分だけ寝るなんてできない、そんな日々が続いておりました。全く寝てないですとか、全く食べていないということはあり得ないんですけども、ほとんど記憶がありません。

私たちが見せられたこの画像だけですが、どうしてこの画像が手に入ったかという、実は駐車場で説明を受けた日曜日、私たち夫婦は一緒に西署に行きました。一方、何人かの刑事さんが現場に残って、会社を訪ねられたそうで

す。会社は日曜日ということで社員は一人も出ておりません。ガードマンの方だったわけですが、警察の方がガードマンに事情を説明しますと、ガードマンの方が直属の上司の課長さんに連絡を取っていただいて、課長さんがすぐ近くに住んでいらっしゃるかは分かりませんが、すぐに飛んで来られた。「私どもの部下であることは間違いありません。ひょっとしたら職場に携帯電話なんか落ちていないかもしれないので一緒に探しましょう。」ということで、警察の方と一緒に探されたそうです。ところが何も出てこない。普通だったらここで、「あ、そうですか。」と終わるのかなと思ったんですが、私はこのITの会社の課長さんにも頭が上がりないというか、感謝しております。課長さんは刑事さんに「自分の会社というのはITの会社です。従って、セキュリティを万全に施しております。会社の隅々にビデオカメラを設置して録画しております。このビデオを持って帰って、解析していただいたら何かわかるかもしれません。」ということでご提供をされたそうです。それを罫に持ち帰り、何名かに分かれて解析をしている中の一枚ということでした。この裏側では、今回の犯人である住田紘一が、上半身をほぼ血だらけになり、何度もトイレに入っては、大量のモップと大量のトイレットペーパーを持ち出してということを繰り返している動画が残っていたそうです。このように鮮明に映っていたそうです。それは、私たちは見せられておりません。

警察の方は日曜日なので、この男性が誰なのかということが特定できないということで、月曜日に会社を訪問し、約240名の社員全員に面通しをしたということで、9月20日付で退職届を出した住田紘一だということがその時点で分かったということです。

そして、警察の何人かの方はすぐに住田を見張るために、大阪の住吉区に飛んだと聞いております。警察の方はすぐ捜査に入るわけですが、この写真の二人が行った先というのは、上の左にありますように、会社の倉庫です。この会社の倉庫は、総務の住田が管理していた倉庫であるわけですから、当然、合鍵も持っていました。警察の方がずっと捜査したんですけども何も発見できなかった。当然ながら住田は、大量のモップとトイレットペーパーを持ち出しているわけで、証拠隠滅のために血は吹き去ってあります。ところが警察の方は、一つのロッカーの中にわずかの血痕らしきものを発見し、ルミノール反応を得たということでした。この血痕は誰の血痕だということで、「お父さんとお母さんのDNA鑑定をさせていただきます。」ということで、警察の方がすぐに飛んで来られました。そして、口の中の粘膜を両方取って調べるといこと



だったのですが、すごいスピードと言いますか、すごい速さで、はっきり覚えておりませんが、翌日か翌々日ぐらいに結果が出て、「この血痕はお嬢さんの血で間違いありません。」と伝えられました。その時私たちがどういう思いをしたかと言いますと、「娘はケガを負わされたまま、連れ回されているんだ。」という思いでした。「ケガの具合は本当に大丈夫なんだろうか。」もう不安がどんどん、どんどん増して、もう助けようもどうすることもできない無力感に襲われておりました。「どうか無事でいてほしい。たとえ大ケガをしていても生きていてほしい。」そう願うしかないという、本当に胸が張り裂けるような毎日を過ごしておりました。

そして、事件から一週間経った時に、県警の課長さんが「これからお邪魔したい。」と夜の8時ぐらいに電話がありました。いったい何なのかなと期待が半分、不安が半分でした。「何か進展があったのかもしれない。」そんな思いでおりました。ただ、入ってこられた課長さんの雰囲気は、いつもとちょっと違うなというふうに感じました。というのは、課長さんの目線が私の目線と合わなかったんですね。ずっと下を向いたままスッと入って来られて、席に座られ、なんと声も掛ける暇もなく、「とても残念なお知らせをしないといけません。」と言われました。その瞬間、ビクッとすわるわけですが、もう想像する暇もなく、続けて課長さんが、「本日本明、大阪で元会社の同僚であります住田紘一を逮捕しました。住田は会社の倉庫でお嬢さんを殺害し、遺体を大阪の実家に持ち帰り、近くに借りた倉庫で遺体を解体、遺棄しました。」と伝えられました。それを聞いたときに妻は、ワーッと泣き崩れて、ドスンと倒れる音が、見ていないんですけども、聞こえました。そして、私は、かつてないものすごい力で上から押さえつけられ、なんか窒息するんじゃないかというぐらいの圧迫感を感じました。何を考えていたかという、何も考えてはなくて、ただただ、この圧迫感を感じながら、涙がポロポロポロポロ出て、涙が止まらないという状況が、どのぐらい続いたのかは覚えておりませんが、そういう状況でした。

やがて気が付いて、警察の方に犯人逮捕のお礼を申し上げ、お帰りをいただきました。警察の方は帰ると記者会見をしなければならぬんですが、構いませんと言われてたんですが、断るすべもありませんので、わかりましたとお伝えしました。警察の方が帰られた後、私たち夫婦は、ただの一度も目を合わすことができませんでした。お互いに背中を向けあったまま、お互いに何を思ったのか分かりませんが、無言のままでした。それから暫くして、息子に連絡をいれないといけないと思い、離れたところに住んでいました息子に電話を入れ、私は男親として初めて泣きながら息子に伝えますと、「お姉ちゃんが殺された。すぐに帰って来い。」ということで帰らせました。親子3人、本当に無言のまま朝を迎えたと思います。朝になったと気が付いたのは、すでに多くのマスコミの方だと思いますけれども、家を取り囲んでおりました。チャイムをピンポン、ピンポンと鳴らし続けられておりました。あまりにピンポンが多いので、妻が一度だけ出て、「申し訳ないけど、そっとしておいてください。」と言って切りました。マスコミの方も節度があったとい

うか、それ以降はベルを押すこともありませんでした。それから4、5日一歩も出ることはできませんでした。外に出ようかなと思うと、誰かが様子を窺っている。向こうの柱、電信柱の影であるとか、倉庫の裏とか、隣の家に影とか、どこからか目線を感じる。これは出られない。出るとワッと取り囲まれるなどということでは出られないので、1週間なのか、4、5日なのか覚えておりませんが、夜中の3時から4時頃にもう誰もいないなということを確認して、走ってコンビニまで食料を調達に行ったのを覚えております。車で行くことに気づかれるなと思って、家から10分ぐらいのところにありますので、走って行きました。事件のことについては、新聞でこのように報道されました。一応テレビでも出ましたけれども。



娘との対面。そして最後の別れ

警察の方に娘の遺体の一部を預かっていただきました。警察の方から「お嬢さんと面会されますか。」と言われました。あ、そうだと思って、「お伺い、引き取りに行きます。」と言って出掛けました。妻に話しますと、「私は行けない。とても会えない。」と言いました。男親である私と男である息子が二人で、お姉ちゃんに会いに行こうということで出掛けました。お伺いすると、霊安室なのか冷蔵室なのか分からないですけども、そこに4、50センチ角ぐらいの白い発泡スチロールの中に、透明なビニールの中に遺体が包まれ、透明なテープで止められておりました。警察の方に言ってテープを剥がしていただき、中身を広げて見させていただきました。ちょうど腰の部分の一部の肉体で、表皮は剥がれ、どす黒く変色して、これが人間の肉体の一部だと言われても分からない、本当に悲惨な状態の遺体でした。警察の方に「持ち上げてもいいですか。」とお尋ねしたら、「どうぞ。」と言われたので、娘を持ち上げてみました。ビニールに包まれたご遺体は、私が、娘が初めて産まれて抱っこした時の重さよりも軽いなという思いがしました。「なんで、こんなことになるんだろう。どうしてこんな目に遭わないといけないのか。」本当に悔しき、悲しきで涙が溢れるばかりでした。息子も多分同じ思いだったと思います。

帰る途中で葬儀場に立ち寄り、葬儀を挙げてやらないといけないと思ひ、申し込みをいたしました。最初

は、妻に対して、「家族葬で送ろう。」と妻に言ったら、猛反対しました。「なんで、悪いことを一つもしていない娘が、世間から隠れて、そんな葬儀を挙げないといけないんだ、人生の最後ぐらいは盛大に送ってあげたい。」と言って、普通通りの葬儀を行うことにいたしました。葬儀屋さんに、棺なんですけれども、遺体のごく一部ということで、赤ちゃん用の棺にしましょうかと言われたんですが、それも断りました。普通どおりに、普通のように送ってやりたいということで、お棺の中に、中央に遺体を置き、ちょっと寒がりだったので、冬用の衣裳を多めに、靴、アクセサリ、バッグ、すべてを揃えて、年間を通してあの世で過ごせるようにということを入れてやりました。そして、最後に結婚するときに着せる予定にしていた着物を羽織らせてあげました。会場に約600人を超える方に来ていただき、本当にありがたいことでした。娘の友人たちにもお願いし一言メッセージを書いていただき、それもすべてお棺の中に入れてやりました。

私たちの地域では、自分より、夫婦よりも若い子ども達等が亡くなると『逆死』と言います。両親である私たちは、焼き場に行けないんですね。そしてお骨を拾うことができません。彼氏に親族に入っていたが、ちょっと残酷かもしれないませんが、彼氏にお骨を拾っていただきました。私たち夫婦が娘のお骨を見たのは四十九日の納骨の時です。事件が起きてからすでに二週間経っておりましたので、お墓が間に合わないかもしれないということで墓屋さんに相当な無理を言って、四十九日に間に合わせるように建立させました。

ちょっとよその家とは違うかもしれませんが、私共は夫婦墓です。従って、私のじいさんばあさんが一つの墓に入り、両方の戒名があり、そこに納骨をする。それから私の両親が亡くなれば、今は父親しか入っていませんが、ここにお骨を入れる。こういう順番なんですね。『逆死』なので、一番手前に来て、向きを変えて、建立をいたしました。その時に見た骨というのは、本当に白いというか、少しピンクがかっているというか、若い骨だなと、思わず食べてしまいたい、そんな思いがありました。

葬儀は本当に盛大に行っていたが、警察の方も混乱がないようにということでマスコミの方をすべてシャットアウトし、葬儀の中に私服警官が5名入っていたが、完全なガードの中で葬儀を執り行うことができました。



裁判に挑む

住田が逮捕されて、葬儀も終わり、後は裁判を待つのみということになるわけですが、なかなか裁判が始まりませんでした。住田に対して検事さんと警察が取った供述調書を私は何十回と読みました。約半年後、事件が起きてからちょうど半年後、翌年の3月に、担当の検事さんが人事異動で変わるタイミングで住田は供述を変えました。「実は、これまで本当のことを言っていませんでした。」なぜ言わなかったかということは説明が長くなるので省きますけれども、「本当のことを言います。」と。本当のことを言った供述は、彼が残していた手帳のメモとことごとく一致し、ほとんど裏付けが取れるという状況で、こちらが正しいんだということが分かりました。その内容は、後で検事さんから供述を取り直し、新しい事実が判明したのでお伝えしますと言われ、検察庁に行き、お話を聞きました。そこで言われたのは、娘はただ単に殺されただけではありませんでした。この会社の倉庫で娘は強姦をされ、強姦をされた上で殺害をされたんだということを知りました。その時点で、再度深い悲しみと言うか、もっと強い衝撃が走って、その時点での私の思いというのは、「住田を決して許さない。」という思いでした。たとえ、神様や仏様が許すと言っても、私は絶対に許さない。現行の法律で言えば死刑しかないわけですが、必ず死刑に追い込むんだという決意をいたしました。

仕事は週のうち半分以下に減らして、その時間をことごとく勉強に当てました。裁判そのものに臨んだこともなく、裁判のことも知りませんでした。裁判そのもの、裁判員裁判の仕組み、或いは、裁判官、検事、弁護士の仕事と役割、位置づけは何なんだろう。そして、戦前・戦中・戦後の非常に悪質な事件を取り扱った小説であるとか、ルポライティングであるとか、雑誌であるとか、そういったものも読み漁りました。すべて200冊以上読んだと思います。そして平成19年から平成23年に至る司法での第一審の判決の本文もすべて読みました。それから検事さんが起訴した段階で恐らく精神鑑定はないだろうと、ないが故に起訴したんだということだったんですが、昨今、情状酌量を求めて、情状鑑定というものがああります。恐らくこれぐらいはあるんじゃないかなと想像して、結果として2回、情状鑑定をされました。もし、相手側の弁護士が精神科医の先生を呼んで、証言に立たせたときに、聞いても分からない病名を話されたのでは皆目わからないのではと思いました。私は、裁判で戦うということは、“知らない”ってことがあってはいけないと思いました。ものすごい専門知識はいりませんが、相手が言っていることぐらいは理解ができる。そうでないと戦うこともできない。そんな思いがあって、ある二人の精神科医の先生の本を5冊ずつぐらい読みました。そして、自分が精神科医ならば、住田に対してどのような神経疾患に当てるのかということ想像しながらやりました。

私が自分なりにこの裁判に臨めたのは、検事さんの言葉でした。私は、裁判がなかなか始まらないので、「なんでこんなに長引くんのだ。」と食って掛かっておりました。今回の検察の起訴内容、ようは「強盗・強姦・殺人・死体損壊・

死体遺棄・窃盗」の6つの罪です。相手の弁護士は、これにおいて争わないということでしたから、すぐに始まるんじゃないかなと思っていたのですが、始まりませんでした。要するに、無期懲役なのか、死刑なのか、どちらか究極の選択というだけならなにも早くあってもいいんじゃないかなと想像していましたが、始まりませんでした。検事さんに、「そんなに長く時間がかかったら、最初のころに持っていたテンションが下がってしまう。」と言ったら、検事さんに怒られて、「あなたは何を言っているんですか。」と言われました。「あなたは、法廷でしゃべりたくてもしゃべれないお嬢さんの代わりに闘うんですよ。」と言われました。もうその言葉がすごく大きな支えとなって、「そうなんだ。娘の代わりに闘うんだ。その闘いのために悔いのないように頑張ろう。」とそんな思いで、一生懸命取り組みました。私がかんばったから良い結果が出たというわけではありません。ただ、自分の中で悔いが残らないように、とにかく頑張ろうと思いました。ただ、裁判というものは残酷なもので、大方の予測は『無期懲役』でした。私たちの弁護士の先生にも「無期懲役ではないか。」と言われました。私は、それが許せませんでした。実は、裁判での闘いは、加害者である住田絃一だけではなくて、いわゆる『永山判決』との闘いでもありました。『永山判決』というのは、1983年に第1次の上告審判決で、最高裁の判断には「死刑の条件」というものがありました。これは9つの条件でした。永山事件というのは1965年に永山則夫が、当時19歳でしたけれども、ピストルで4人射殺した事件でした。その最高裁が出す死刑に至る条件というのは9つありまして、その中の一つに「結果の重大性、特に殺害された被害者の数」というものがありました。要するに、一人の殺人の場合は、「たった一人」とよく表現されますけど、非常に失礼な話ですが、一人のときは有期刑、長期15年とか、20年、30年とかですね。二人の殺人において無期懲役。三人以上で初めて死刑という基準だったんですね。本当に馬鹿げているなと思いました。私たちは小さいころから、小学校のころから、「人の命は地球よりも重い」と言われて育ってきました。にもかかわらず、判断を人の死の数で決めるのかと、大きな疑問を持っておりました。動物の中で唯一非常に複雑な感情を持っている人間を判断するというのに。だからこそ、徳があり、知能があり、経験がある方が正しい判断をしなくてはならない。そこで人間が登場するのだと私は思っています。でなかったら、過去の判例に従ってやるのであれば、たくさんのビッグデータで、AIに任せれば答えはすぐに出ます。そうでない難しさが問われるのにもかかわらず、単純に人の数で決める。殺人の数で決める。本当に納得がいけない話でした。重大で、犯罪予防の観点からやむを得ない場合には死刑の選択も許されるというのが、最高裁でのだいたいの判断ですけれども、それは、最高裁としてはできるだけ死刑を出したくないんだというスタンスが根底にあるということですね。その結果、どういう結果が起きてきたかということ、ちょうど、みさの事件の一年前だったですけれども、どこの県だったか分かりませんが、マンションの一室で、隣の女性が隣の男性

に殺害され、自分の部屋で遺体を細切れにし、それを全部トイレで流したというニュースがありました。その犯人ですら無期懲役でした。誰が見てもこんなに酷い事件で、死刑の他に何かあるだと思われる事件でもことごとく無期懲役というのが、『永山判決』の後遺症で残っているんですね。これは判断を下した方が悪いということよりも、こんなことを言って申し訳ないですけれども、公務員病だと私は思っています。要するに上に逆らわない。逆らえない。ようは、最高裁が出す判決を超えるわけにはいかないという人事評価が返ってきますから、常にヒラメのように上を向いているしかないということなんですね。ようは、被害者を見ていないということです。自分のための裁判しかやっていない。そんな感じしか受け取れないんですね。そういう無念さを多くの被害者が抱えていたということですね。初犯で、一人の殺人ということになると、当然、住田は無期懲役かなということ傾いていってしまいます。

これとの闘いについては後程またお話しします。私はこうやってお話をさせていただくときに、いつも辛い思いをするシーンというものがああります。それはどこかという、娘がもう助からないなと死を覚悟したときです。我々は経験がないわけですが、恐らくこれはもう助からないなと思う瞬間。そのとき娘は何を思ったんだろうということを考えると涙が止まりません。「お父さん助けて。」と言ったのかなと思うとたまらないんですね。何もしてやれなかった。助けることすらできなかった。親として幸せな結婚をさせてやることすらできなかった。親としての責任が果たせなかった。こういう思いは、恐らく自分の命が尽きるまで消えないんだろうと思います。加害者によって私たち家族は終身刑を受けたのと全く一緒です。そして、娘は恐らく結婚を約束した彼氏に対して、「こんなことになって申し訳ない。」とたぶん死ぬ直前に詫言のたのらうと思います。だからこそ、私は住田が許せないんです。「もし、無期懲役になったらどうするか。」ということも検事さん、警察の方にも言いました。「この手で殺す。」と言いました。もし、無期懲役ならば、現行の対処で考えれば、無期懲役囚は約30年から33年経過の後出てきます。1年に一人か二人ぐらいですけれども。そうすると、住田が出てくるのが60歳過ぎに出てくる可能性があります。そのとき私は90幾つかになっています。もう肉体的にどうこうできる年齢ではありません。諦めるかという諦めるつもりもありません。私は住田を24時間、このシャバで生かしておくわけにはいかないと思いました。どんなに非難されようと、ヤクザを使ってでも、第三国人を使ってでも、住田が出所すれば、さらってきて、私の目の前に連れてきてもらう。目の前に連れてきて、娘が味わった屈辱以上に屈辱を味わせてから死んでいってもらう。そのことによって私が逮捕され死刑なろうと、何の悔いもないと思いました。残念なのかどうなのか分かりませんが、そういうことにはなりません。住田は死刑判決を受けることになりまし

多くの方に支えられて

私はあらゆる方に感謝をしているわけですが、まずは、あのとき、事件かどうか分からないうちから捜査並みの動きをしてくれた岡山県警に対して、そして、警察に協力してくれた会社の上司。そして、裁判において死刑を支持していただいた裁判員の方。そして裁判官の方。そして、多くの支援をしていただいた支援団体の皆さん。それから近所の方々。あらゆる方々のお世話になり、いろんなことが良い形で符合したことによって、『死刑』という結果を手にすることができました。皆さんご存じかどうか分かりませんが、死刑判決というのは、普通の判決とは違います。裁判員裁判では、裁判員が6名、プロの裁判官が3名の9人で評決いたします。普通でいうと九分の五以上で評決が決まるわけですが、こと死刑に関してはそうはいきません。死刑に関しては、もし裁判員6名全員が死刑、裁判官3名全員が無期懲役ということになると無期懲役の判決しか出ません。少なくとも9分の5以上の中に、最低一人以上の裁判官の支持があるというのが、死刑判決の原則なんです。私のこの事件の場合、どれだけ死刑を支持いただいたかは分かりませんが、少なくとも一人以上の裁判官が死刑を支持していただいた結果でありました。本当にそういう意味では恵まれていて、熱血漢のとても優秀な検事さんの力も大きいですし、裁判長の本当に温かい見守りがありました。

実は、裁判員裁判の3日目に住田がちょっと涙を見せたんですね。それは今まで能面で陳述していた住田が、突然涙を見せました。それは、妻が陳述しているときに、自分がお腹を痛めた子を失って、どれだけ悲しい思いをしているのか、母親として辛い思いをとうとうと訴えておりました。そのときに住田がワッと泣き始めました。それまで住田がどう言っていたかという、自分の目的を遂げるために、殺人は手段として有り得ると言い切っておりました。「こいつ間違いなく死刑だな。」と皆思ったでしょう。ワッと一瞬だけ住田は泣いたんですよ。なぜ泣いたんだろう。それは、常々、住田の両親が、「死んじゃいけない。生きて一緒に罪を償おう。」ということをずっと言っておりました。ところが、住田は「こんなことをしたんだから、死刑は間違い無い。」と半分以上諦めて、何も受け付けないという態度だったんですね。それが、自分がもし死んだら、母親ってこんなに悲しむんだとその時初めて思って、ワッと涙が出たということでした。決して、大変なことをしたという反省の涙ではありません。それを勘違いされたくなくて、私は4日目、弁護士の先生と検事さんに、検事さんの最終弁論の前に私の陳述を入れさせてくれと言っていただきました。5分間入れるということでした。徹夜でいろいろ考え、7つの項目を申し上げようと思っていました。その第一は、住田の涙は反省の涙ではないと、勘違いをしてくれるなということを言いました。あれは自分の母親を悲しませるだけであって、私に対してとか、みさに対して、申し訳なかったという涙ではないんだ。そこを勘違いしないようにしてくれということを訴えました。実は、7つ言えるかなと思って、しかも5分間といったら時間がないので、「長すぎるな、たぶん20分

はかかるな。」と思いながら臨みました。どうすれば5分という制限を取っ払ってしゃべることができるか、相手の弁護士から長すぎるからやめると言われたらどう対応しようかということも考えながら、ただ検事さんには、「ひょっとしたら7つあるけど、頭が真っ白になって言えなくなるかもしれない。その時はキーワードを出してください。」ということで、あらかじめしゃべる内容を伝えてありました。案の定しゃべっていたら、1つは言いませうけれども、2つ言ったところで頭が真っ白になって何も思い出せなくなりました。困ったなと思って、そのときに裁判長の目をじっと見て、「裁判長、お願いがあります。本当はこの場でどうしても聞いていただきたいことを7つ用意してきました。」ところが、2つしゃべった段階で頭が真っ白になって思い出せません。少しお時間いただけませんか。」と申し上げたら、裁判長がおっしゃったのは、「どうぞゆっくり思い出さず考えてください。」と言われました。その言葉に本当にありがたいなと感謝しました。そうしたら検事さんがキーワードを言ってくれて、アッと思い出して、最後までしゃべることができました。

それが終わると、いったん閉廷して、裁判官の方と裁判員の方がいったん引込み、しばらくして出てこられた時には、私に対して質問があるというのがシナリオなんです。裁判長の最初の一声は、「質問は一切ありません。」という答えでした。その瞬間、変な言い方ですが、「勝った!」と思いました。「理解していただいた。」と思いました。



裁判が終わって、刑事事件としては一応の決着はつききました。住田の弁護士さんが即時控訴をされましたけれども、住田本人の手で一月半後に控訴を取下げましたので、死刑が確定いたしました。後は死刑執行を待つのみという状況なんですね。一つ許せないなと思うのは、裁判長が「死刑に処す。」と言った後、「もしこの判決に不服があれば、高等裁判所に控訴することができます。」と伝えるときに住田は、首を大きく横に振り、「そんなことはしない。」と。「あ、潔いな。」とその時思ったんですね。だから、「これで終わったんだ。」と私はその時に思い、記者会見をしておりましたら、記者の方から「即時控訴になりました。」と聞きました。「え、なんで? 本人、受け入れていた

じゃないか。」と言ったら、これは弁護士特権でということでした。なんで弁護士にこんな弁護士特権が必要なんだという思いですね。一般人としてですよ。被告人本人が「しない。」と言っているのに、なんで弁護士が即時控訴をするのかということですよ。ようは自分が地方の第一審で『敗訴』という記録を残したくないというだけです。誰のためにあるの。被告人のためではなくて、本人のためにやっている。こんなことがまかり通るのかという怒りがそのときはありました。まだ言いたいことはあるんですけども、ちょっと止めておきます。

【加害者に伝えたい思い】

刑事事件としては一応決着がついて、しかも裁判員裁判、被害者参加制度という先人たちが作ってくれた制度に乗っかって、良い形で刑事事件は終了しましたけれども、じゃあ私たち家族に何か喜びがあるのか、何もありません。娘を無事生きたまま帰してもらえれば、本当にうれしく、諸手を挙げて歓迎をしますけれども、刑事事件というゲームが終わったんだという印象しかありませんでした。

私は住田に会いたいと思いました。検事さんは前例がないのでよく分からないということで調べていただいたんですけども、死刑囚に会えるかどうかということが、まず問題でした。私は手紙を書きました。死刑囚に対して。そして面会を求めようと思いました。面会はですね、死刑囚に関しては、親以外の面会はできません。兄弟も会うことができないんですね。もし、死刑囚が別の事件を抱えていて、それを担当している弁護士さんがいらっしやれば、その弁護士は接見できるということでした。何事も例外というのがあって、それには拘留所の所長の権限で、死刑囚の心を乱さないというのが前提であって、会う目的が明確であれば、最大月2回、1回が15分以内の面会を認めるとありました。私はそれに賭けて、何年かかろうが、何十年かかろうが、何十回でも会おうと。そして、懇々と娘のことを知らせようと思いました。住田は娘のことをただ好みのタイプというだけで何も知りません。幼少期から中学校、高校、大学、社会人となって亡くなるまで、私たち家族がどれだけ娘を愛し、大事に思ってきたかということを懇々と伝えてやろうと思いました。鬼畜のような心を持った住田でも、何年も続ければ、恐らく人間としての感情というのが蘇ってくるのではないかなと思ったんですね。死刑執行されるまで、住田からただの一辺のお詫びも、一輪の花も、一本のお線香も届いたことはありません。ましてや、賠償請求に応じるわけでもない。反省をしていないなど。拘留所員が反省をさせてくれるのか? 誰もしてくれません。拘留所では3食が保障され、懲役の義務もありません。差し入れも自由です。本も読める。テレビも見れる。ある程度の制限はありません。自由で過ごせる、平静にしていれば、国の手によって死刑執行されるわけですから、それまで余生を安らかに過ごさせてやりたいという、国の配慮なんですね。とんでもないという世界です。娘は、安らかに死んでいったんでしょうか。

もっと生きていたかったのに、生きさせてもらえなかったんですね。住田によって人権を奪われてしまったんです。片方がそういう思いをしたのにもかかわらず、なんで死刑囚である住田が安らかな余生を過ごさないといけないんですか。しかも私たちの税金を使って。3食保障されているわけですよ。病気になれば警察病院があって、タダで治療してもらえます。もし私たちが外でご飯を食べて、黙って出て行ったらどうなりますか。捕まりますよね、無銭飲食で。病気になったら病院へ行きます。保険証を持っていますよね。まあ、1割負担か、2割負担か、3割負担か、どちらにしてもお金は払います。犯罪をした人間は、治療費も払わずに治療を受けられます。死ぬまで看護を受けられるんですね。だから犯罪が止まないんです。致命傷にならない程度に、シャバではご飯が食べられないからまた戻ってくる。ご飯を食べて退屈したらまた出ていく。また悪さをして戻ってくる。これをみんな私たちの税金で養っています。法務省の方に言いました。「死刑囚に限らず、拘留所、刑務所に入れる犯人というのは、日本国民ですか。」とお尋ねいたしました。答えはありません。私たちは日本国民の定義と言いましようか、日本国民の義務というようなことを言われました。『教育を受ける権利』、『働く義務』、『納税の義務』というのがあります。国民の三大義務というようなことを言われました。これを果たせるのが日本人ですよ。税金も払っていない。働いてもない。軽微な労働。社会に出たときに少しお金を持たせてやらないといけないから、それから社会に出たときに何かの技術をマスターしておかないといけないという懲役は労働ではありません。ある意味、教育ですよ。せいぜい。税金も払ってもない。働いてもない。治療費も払わない。彼らは同じ日本国民ですか? 日本国民を脱サラ化したらどうですかというのが私の提案です。国が犯罪被害者に充てているお金は、約20億円平均です。ところが、加害者に使っているのは、拘留所とかの件費を除いて、純粋600億から2000億と言われております。どちらの数字が正しいか分かりませんが、最低600億以上ですね。これはバランスが欠けていないか、どうでしょう皆さん? 私は殊更、被害者だけに肩入れしてほしいとは思っておりません。加害者にも人権を考えるときが来るでしょう。順番が違いませんか。被害者が癒され、被害者の人権がある程度回復されてから、加害者の人権を考えられるといいんです。最初から加害者の人権を考える日弁連には、私は反対をいたしております。二つ足して二で割れというのが、私の基本的な考えです。どちらもつかず、600+20。620÷2で310億です。こんなに被害者の方もいりません。返します。返すと今まで使っていたのが足りない。足りないのをどうするかと言ったら、働けですよ。明治初期の北海道の開発時代に、足に鎖を付けて炭鉱等で働かせていましたよね。それで、たくさん亡くなった方がおります。人権のことを言えば前に進まないのかもしれないですが、自分の飯は自分で食べよということなんですよ。日に一日一万円でも一生懸命働いて、逃げないように足に鎖を付けてでも一万円を稼ぐ。稼いだお金で食事代を払う。税金も払う。治療費も払う。残ったものを貯金する

なり、被害者の賠償の一部に充てる。それで何が悪いんだということですね。普通だったら働けないのに、強制でも働かせてもらって、給料でも上げようかと言っているんですからぜひ、そうさせてやってあげていただきたいと思います。

反省させて、反省させて、反省させて苦しむ。人間の気持ちがあれば苦しむはずなんですよ。カッと動きますよ。なんてことをしたんだろう。自分は親に対して迷惑をかけた。彼女に対してこんな思いをさせてしまった。被害者の家族にもこんなにも迷惑をかけた。どうやって償ったらいいんだろうと、初めて苦しんで出てくると思うんですよ。その苦しみを受けさせない限り、楽には死なせたくないというのが、私の想いです。まあ、そういうこともありませんでした。

被害者家族の思い。そして願い

事件を通じて不可解な点がまだまだたくさんあります。犯罪被害者の家族って、いつも何を思っているんだろうということをも多分知りたいんだと思うんですが、一番思っているのは、加害者に対してではありません。亡くなった子どもに対して申し訳ないという思いが消えないんですね。私で言えば、本当に幸せな結婚をさせてあげられなかったということ、世間並みのことができなかったということ。そして救えなかったという悔いがどうしても消え去りません。そして、頭の中にはあの小さいときにぶん殴った、なんでぶん殴ったんだろう。痛かったらどうな。なんであんなことをしたんだろう。ああいうものが欲しい、いやそんな物は買わないと言って拒否した。なんで拒否したんだろう。なんで買ってあげなかったんだろう。いろんなことが出てきます。それがもうずっと消えないんですね。そんな思いを恐らく、誰を責めるというより、自分を責めるのがほとんどではないかなと思います。

被害者の家族が思っていること、願っていること。対象としては、裁判においては、真実を追求して欲しいということですね。とにかく、真実を明るみに出して欲しいと。マスコミに対しては、真実を伝えて欲しいということですね。私は、岡山のNHKさんには取材を拒否しております。なぜかという、娘の事件を「強盗殺人」と表現しました。私は、正しく報道してくれと言いました。「強盗・強姦・殺人」なんだと。「強姦」という言葉を、娘が生きていけば使うことはありません。ただ、亡くなっているが故に、あえて被害者の家族が許す、ぜひ使ってくれと言っているんだから、なぜ使わないんだ。「NHKの倫理規程の中で…」と。関係ないと。「強盗殺人」で受ける印象と、「強盗強姦殺人」で受ける印象が一緒ですかということですね。違いますよね。それが、真実を伝えるということになりますか。被害者の家族が拒否したらだめですよ。正確に言ってくれとお願いしていることに対して、NHKの勝手な倫理規程でできないということは何なんだ。もう放映料払わんぞと聞きたいくなるようなことなんですけど。真実を伝えて欲しいという願いがあります。

加害者に対してはどうか。私たちが一番望んでいるのは、賠償金ではありません。一番望んでいるのは、心の底から本当に反省をして、詫言するという行為ですね。それを死ぬまで続けて欲しいわけですよ。人間ですから、私たちも、毎日、毎日、そうして尽くされたら、心が許せる気になるかもしれません。今の段階ではないですけども。私はずっとそう思っていました。だから、反省をして欲しいんですよ。自分がしたことを認めて、どれだけの人にどういう影響を与えているのか、それが本当に反省して、自分にできる行為とか、償いをやり続けて欲しい。これが被害者の家族の声です。これが裁判の時の新聞記事です。

私は、『あすの会』の存在を勉強中を知っておりまして、事件の判決が出た段階で、警察の方から「『あすの会』をご存じですか。」と言われたので、「知っていますよ。」と。できた経緯もどういう活動をしてきたかも知っておりました。「入られたらどうですか。」と言われたので、「あっそうか、入るという選択肢があったな。」と、ちょっと気が付いておりませんが、『あすの会』に入りました。昨年の6月に、岡村先生が19年の活動の幕を閉じられたということで、19年の歴史で築いてきたものを全損するわけにはいかないという関西のメンバーの思いが強く、「つなぐ会」という形で、関西だけで意思を尊重しながら、また新たな活動を続けていこうということを決意いたしました。関東はですね、『にじの会』と言われて、月に1回、午後2時に集まる『にじの会』というのを設立しているようです。そんな話しか聞いていないので、どんな活動をしているかは分かりません。



私が望むことと言うのは、『あすの会』でできなかった直接支援を一つしたいんです。支援団体の方がやっている直接支援があります。警察の方がやっていらっしゃる支援もあります。犯罪被害者の家族でない、同じ境遇の者でしかできない支援のあり方というものもあると思っています。私は、『つなぐ会』でできるかどうかは分かりませんが、被害者の駆け込み寺にしたいと思っています。思いの丈を誰に遠慮することもなく、我々同じ境遇の前で話してください。そういう機会をきちんと設けていきたいと思っています。全部受け止める。もうプラスもマイナスもなく、とにかく受け止めてあげる。そういう場を作っていきたいというのが一つ。それと、今あらゆる支援活動中で一番ネックになっているのが、経済的支援です。明日のご飯が食べられない方に対して、明日のご飯を提供できる場所がありません。いろんな形で支援する仕組みができあがりつつありますけれども、警察の方で犯罪給付金という犯給法というのができて、救う形が取れているんですけども、実際にお金が支給されるのは、平均6.7か月後です。「明日のご飯、6ヶ月待ってね。」と言えますか。言えませんよね。今必要なら、今

助けないと意味がないんですよ。それができるシステムがないんです。残念ながら。それをやっていきたい。そのためにはお金がいります。従って、犯罪被害者支援基金なるものを私はこの手で作ろうというふうに思っています。救いたいときに救える。贅沢をしてもらうということではありません。普通だったらできていたのに、犯罪に遭ったからが故にできなくなった。そういう部分をどうカバーするか。瞬時にカバーしていく。そのための基金を作らなくてはならないと思っております。これが二つ目ですね。

ごくごく最近、私が思っているのは、いくら犯罪を防ごうと思っても防ぎ切れないということです。大量殺人であるとか、行き当たりばったりみたいなものは分かりませんが、狙われたらまず防げないです。なぜかという、狙われる側は狙われるとは思っていませんから。ところが、狙う側はしっかり標準を定めて狙って来ますから勝てないですよ。いくらスタンガンを持とうが、GPS機能を持とうが間に合わないんです。だからするなということではありません。もちろん被害に遭わないようにすることも大切ですけども、それよりもっと大切なことは、犯罪を起こす人をどうやって減らしていくかということだと私は思っております。それで一番必要なのは幼少期の教育だと私は思っております。県の教育委員会にいつも悪口を言いますが、不都合なことを言いますが、学校の先生しっかりしてくれということですね。よくマスコミで皆さん方も聞いていると思いますが、この中に教員の方がいらっしゃったら失礼な話ですけども、「我が校にいじめはなかった。」というニュースがいつも出ております。しばらくすると校長先生が「いや、ありました。」と言い直します。で、教育委員会が出てきます。この中で教育委員会の方がいたらごめんさな。教育委員会なんか消えてなくなれ。」というのが私の意見です。教育委員会が教員の邪魔をしているんですね。教員の中には、公務員だから、収入が安定しているからという動機で教員になった方が大半だと思います。だけど、教育機関に携わっている内に本当の教育とは何なのかと目覚めて行動すれば、やれ教育委員会が口を出す、PTAとモンスターペアレントが騒ぐ。先生方は毎晩、夜9時、10時になって遅くなって帰ってくる。教育委員会とPTA等のサンドイッチにされて、やりたいと思っていたことが段々できなくなってきた。ただルーティンをこなす。そんな感じになってきたのが現状ではないんでしょうか。私は学校の中で、ちょっと動作がおかしな、ちょっと言葉遣いが下手だなと思う子は、素人の私が接しても分かります。まして、毎日接している学校の先生がそれを分からないはずがない。あり得ないでしょう。普通に考えて。にもかかわらず、しゃあしゃあと校長先生が「我が校にはいじめはなかった。」というんですね。あり得ない話ですよ。見て見ぬふりをしているということなんですよ。私が言いたいのは、これはアメリカのデータですけども、「サイコパス」という言葉で過激に反応される方がおたらごめんさななんですけど、アメリカの重篤な、銃で何人も殺害したとかいう酷い事件を起こす人間の約50%が「サイコパス」だと言われている。「サイコパス」が全部悪いことをするのは

と云えば、そうではありません。条件がいくつか重なった時にそういう事件というのが起きるんだそうです。「サイコパス」というのは、神経疾患とか、精神病質というものです。よく知られている反社会的なパーソナリティ障害です。利己的だったり、自分中心であったり、それから人に共感できないとか、感情が欠如しているとか、良心が欠如しているとか、そういう自己中心的な考え方をザクッと「サイコパス」というわけですけど、その中で、3つの条件が重なった時だけに犯罪に行きやすいと言われております。一つは脳の病気です。脳の前頭前野の扁桃体に繋がる機能が低下している。記憶を認識して、それを伝える機能が弱まっているということですね。これが一つ、病気ですね。もう一つは遺伝子です。お父さん、お母さんの遺伝から流れを受けたもの。これに加えてもう一つが、幼少期の身体的虐待なんですよ。この3つが揃ったときに悪い方向に行ってしまうのが50%ぐらいあると言われております。1、2は変えられません。現在の医学ではですね。3番目の環境は変えられますよね。幼少期、今はもう親の虐待が多いですけど、子供たちの虐待を防ぐのは誰でしょうか。学校の先生ですよ。こんなふうに限定してしまうと叱られてしまうんですけども、世の中どんどんどん離婚だったり進んで、母子家庭の方が結構増えていらっしゃる。お母さんと子ども。この子どもたちの全部が悪いことをするのではないですよ。

私が言いたいのは、母子家庭の子どもさんというのは、お父さんの愛情を受けていないですよ。普通だったら受けられるのが、お母さんの愛情も受けられる機会が少ない。仕事に行くと稼がないといけませんから、生活しないといけないから、働きにいかないといけない。そうするとどうしても家庭の中の話が少なくなる。愛情が薄くなる。ご飯を一人で食べる。ゲームを見るしかない。友達ができない。コミュニケーション不足になる。コミュニケーション能力が衰えてくる。従って、自分の世界に籠ろうとする。学校へ行くと、学校でちょっと変わった奴だと皆でいじめる。裕福な子がいじめているわけですよ。そうすると学校に行きたくなくなる。そんなことを小学校、中学校とずっと、社会に出てまでもいじめられてというのがありますよね。そうすると逃げ場がないんですよ。その子供たちは、で、学校の先生たちは何をしているの。お勉強は塾の方が進んでいますよ。勉強だけなら。進学のための勉強ならね。学校は何をするの。人としての教育をするのが学校ではないのか、と私は思っております。勉強なんて嫌いな子はしないわけですから、教える意味がないんです。好きな子はどんどんします、ほっといても。だけど、我々の将来を担う子ども達を、まっとうな大人になってもらうためにするのが教育ではないですか。それができるのが、やっぱり小学校、中学校の頃だと思います。大きくなってくると固まってしまう。なかなか変えづらくなる。そのときに、この子はこういう家庭の事情で愛情が少ないんだ。少ない愛情を、先生の愛情と生徒たちの愛情をもって、そっこの道じゃなくて、こっちの道だ。こっちの仲間だ。入れてあげる。それが一番大切なんではないかなと思うわけなんです。

すね。大人になるにつれてやってはいけないこと、やらないといけないこと、すべきこと、すべきでないことをきちんと判断できるように教えてあげる。そして何よりも、自分よりも年長者、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんを大切にするとか、昔の道徳みたいですが、ごくごく人間として当たり前のことをきちんと教えていくのが学校ではないのかなと思います。そして、いじめる側に立ったら、やがていつか自分より強い人間が現れたときに、「お前がいじめられるんだよ。」ということをきちんと教えてあげられる。ある意味、私は、体罰は必要だと思っています。私も小学校の頃、よく先生に殴られました、先生に。でもその先生は、ずっと覚えてます。中学校になっても、小学校の時の先生とお付き合いがありました。それだけ心に残るんですね。暴力を振るいたくて振るっているわけではありません。子どもでも分かります。あのとき叱ってくれたおかげで、自分が何とか立ち直れたというか、まともに生きていられるんだと、感謝しないんです。そういう思い出を殴られることによって築けるわけですよ。何にもプラスもマイナスもなく平均値で終わって行く、何にも記憶に残らない学校生活で楽しいのかなと、私は思います。むしろ、先生と生徒たちの思い出作りというか、お互いにあの時に一緒に過ごしたという共有体験を築き上げて、本当にいい大人になってもらえる記憶にしてほしいと僕は思います。それが、一番犯罪を減らす早道だと思っています。ですから、他にもできることはあると思うんです。だけど、学校の先生には、特に、小学校や中学校の先生にはお願いをしたいなと思っています。

【最後に】

そして、一般の方々には何を思うのか。最後、私の娘を見ていただきながら終わりたいと思うんですけども、岡山県警の方に作っていただいたメモリーです。中学校の時の写真。成人式の時の写真。おじいさんとおばあさんと一緒に撮っています。猫アレルギーの娘が、隣に

迷子にきた子猫を拾い上げて、この子だけアレルギーは出なかったんですけど、もう渡したくなかったんですけども、一月後に里親が現れて持って行ったときには全員で泣きました、悲しくて。これが三人娘で、この写真を遺影に使わせていただいています。これが、私が一番気に入っている娘の彼氏との写真。これ個人情報なんですけど、出していいのかわかりませんが、娘が一番幸せそうな顔をしています。どちらかというと人の前に出いけない娘が、彼氏の前ではいつもリーダーシップを発揮して、旅行なんかを決め、彼氏がい、はいと言ってついていくという、こんな姿の彼氏だったので、幸せそうだなと思って、気に入っています。彼氏はまだ結婚していません。早く結婚してほしいんですけどもね。なかなか結婚するとは言わないんで、困っています。

最後に、一般の方々ができることは必ずあるんです。私は猫好きなので、猫の死にかかっているのを見たらほっとけなくて、一時、12匹ぐらい飼っていて、皆から猫屋敷なんて言われて辛い思いをしておりましたけれども。これ例え話なんですけれども、皆さんの目の前に、溝に猫の赤ん坊がいて、ほっといたら死ぬという子が目の前にいます。そのときにあなたは助けることができるか、できないか。ほとんどの方はできるはずなんです。だけど、自然のものだから、自然の摂理に従って、生きる力がなくなったら死んでいけばと見過ごすこともできます。どちらでもできます。私は、もしあなたが手を下さなかったら、死んでしまう猫であっても、あなたが手を出したら生きる道があるんだら、手を出してほしい。そういうそっち側に立ってほしいという思いなんです。特別なことをしろとか、何かしろということではなくて、自分に悔いを残さない支援をやってほしい。あの時に見過ぎてしまった。あの時にちょっと手を出していたら助かっていたかもしれないのに。というような悔いを残したって良いことないですよ。だったら、さっさと手を出して、家族が反対しようが、自分には見殺しにはできないんだと、それで納得しない奥さんは離婚してください。私は見捨てることはできません。従って、一旦餌をやる、もうかわいくてしょうがないですよ。だから12匹を、一匹一匹里親を探して、今現在2匹になっております。売れ残りのちょっとにゃん相が悪い、愛想の悪い猫しか残っていないわけですけど、そういう子が自分を頼りにしてくるわけですよ。僕が餌をやらなければ死んでしまうわけですから。よそではもらえないので、そこに自分の価値があるなどと思っています。ですから、皆様方も大きさに考えるのではなくて、自分でできることを何か一つでもやって欲しいなと思います。それは募金の5円でも、10円でも構いません。皆に、「講演があるよ。だからちょっと聞きに行こうよ。」と声を掛けることでも支援だと思うんですよ。そういう形で、本当に被害を受けた方の多少のプラスにでもなるような行動を取ってほしい。無理をしたって続きます。無理がなく、いつでもできることをやってほしいということですね。

もうちょっと何か言いたかったことがあったんですけども、もう時間も参りましたので、長いこと言いたい放題言わせてもらいましたけれども、長時間ご清聴ありがとうございました。これで終わらせていただきます。

「犯罪被害者週間」

キャンペーン活動



「犯罪被害者週間」期間中(11月25日~12月1日)、静岡県警察音楽隊のご協力を得て、県内5か所で広報活動を実施しました。

キャンペーン活動には、静岡県警察を始め、静岡県暮らし交通安全課、静岡市、沼津市、静岡県弁護士会、静岡県司法書士会、海上保安庁、更に常葉大学防犯サークル『JUSTICE』のメンバーにご参加いただき、会場にお集まりいただいた方に啓発品約1,000部を配布し、犯罪被害者支援への理解と協力を呼びかけました。



11/2 静岡県庁本館前



11/8 ららぼーと沼津



11/17 ららぼーと磐田



11/20 静岡県庁富士山展望ロビー



11/27 エスパルスドリームプラザ



募金への協力も呼びかけました(*^_^*)



静岡市生活安心安全課では、毎年、市役所ロビーにおいてパネル展を実施しており、今年度も支援センターのパamフレット等を展示していただきました。



感謝状贈呈・「栄誉章」受賞・犯罪被害者支援功労者表彰

「犯罪被害者等支援講演会inしずおか2019」の会場において、多年にわたり当支援センターの活動等に対し、多大なご支援・ご協力をいただいている方々に感謝状が贈呈されました。

また、長年、犯罪被害相談員としてご活躍いただいている鈴木博子相談員は、昨年10月18日に東京都で開催されました「全国被害者支援フォーラム2019」において『栄誉章』を受賞されたことから、同会場において同賞の伝達が行われました。さらに、直接支援員として活動されている鈴木龍恵支援員は、長年の功績が称えられ、犯罪被害者支援功労者表彰を受賞されました。



犯罪被害相談員 鈴木博子 様



直接支援員 鈴木龍恵 様

左から順に、

- 一般社団法人静岡県歯科医師会 様
- 川崎工業株式会社 様
- 株式会社加藤オートリペア 様
- 株式会社伊藤園 静岡相良工場 様
(当日所用により欠席)



2019年度日本財団預保納付金支援事業

犯罪被害者等支援ボランティア養成講座

令和元年8月7日から開講された「犯罪被害者等支援ボランティア養成講座」は、12月12日までに全9講座が終了し、1月に筆記試験、2月に面接を実施した結果、受講生5人に来年度から被害者支援ボランティアとして活動していただくことになりました。



犯罪被害相談員・直接支援員 継続研修会・県外研修会

現在、支援活動に従事していただいている犯罪被害相談員・直接支援員に対する継続研修会や静岡県弁護士会との事例検討研修を開催しました。更に、県外研修として、質の向上研修会や全国秋期研修会にも参加し、スキルアップを図りました。



ホンデリング ～本でひろがる支援の輪～

静岡県警察職員の皆様を始めとして、多くの方にご協力いただき、平成31年1月1日から令和元年12月31日までのホンデリング・プロジェクトによる寄付は、**281,229円**でした。

これから卒業や入学、異動や退職、引っ越し等で不要になった本やDVD・CDを整理する機会が増えると思います。古本等の査定を担当する(株)バリューブックスでは、古本5冊以上あれば送料無料でご集荷しておりますので、ぜひこの機会にご協力をお願いします。

申し込みには、当センターのID番号「38-N23しずおか」と記載されている申し込み用紙をご使用ください。詳しくは、支援センター事務局へお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。



○寄付につながるもの

★本の場合
ISBNコードが付いているものが対象です。

本の ISBN (アイエスピーエヌ) とは、本の ISBN とは国際標準図書番号 (International Standard Book Number) の略称で世界共通で図書 (書籍) を識別する為に記されるコードです。日本では日本図書コード (図書 JAN コード) として利用されています。

★CD・DVD・ゲームの場合
規格品番が付いているものが対象です。

CD・DVD・ゲームの規格品番とは、規格品番とは、日本レコード協会が定めた規格で CD・DVD・ゲームソフトなどの市販されているメディアに対して付けられたコードです。ケースの背表紙やディスクの印刷面に印字されています。

◎はアルバム、CD のみ対象となり、シングル、CD アイドルの複製集、特典付き CD は取り扱えません。

※お取り扱い商品につきましてご不明な点は、**支援センター 株式会社バリューブックス** (0120-826-295) までお問合せください。

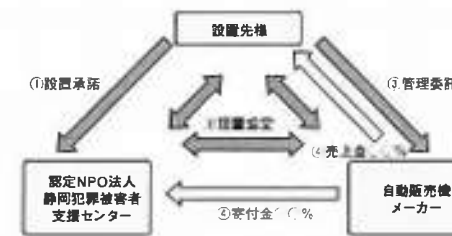
寄付型自動販売機

5社のドリンクメーカーのご協力のもと、県内34ヶ所に寄付型自動販売機を設置していただき、平成31年1月1日から令和元年12月31日までの1年間で、

432,416円

を寄付金として頂戴いたしました。

手軽にできる社会貢献活動として、「寄付型自動販売機」設置促進を図っております。個人でも企業でも設置ができますので、設置をご検討いただける場合は、事務局までご連絡ください。ご希望のドリンクメーカーと一緒に説明に伺わせていただき、寄付金率等の契約条件についてご説明させていただきます。



募金箱

セキスイハイム東海株式会社様や静岡トヨペット株式会社様、JA静岡市様にご協力いただき、店舗や支店等に募金箱を設置していただいております。



未使用のテレホンカード

未使用のテレホンカードは、電話料金のうちダイヤル通話料金の支払いに充てることができます。

当センターでは、被害者やご遺族と電話連絡をする機会が多いことから、通話代を補填していただけることは大変助かります。

不要なテレホンカードがございましたら、ぜひ、ご寄付ください。よろしく願いいたします。

